スプラッシュ(三)
花と水槽

市川司幸(いちかわつかさ)

登場人物

友悟：沼津市に住む会社員。山王神社の近くに家を持っており、結良と暮らしている。古い邦楽が好きで、流行りの物に興味がない。

結良：心が不安定になると魚になる体質の女性。精神を安定させるため、平日はネットで知り合った男性と性行為をすることで自己肯定感を得ているが、それでも溜まった不安感は休日を友悟と過ごすことで解消している。

井上：友悟の会社の同僚。性格は友悟と反対で、積極的かつ新しい物好き。人付き合いが上手く、会社でも出世頭。友悟を「若年寄」と呼ぶ。熱帯魚を飼っており、友悟にも勧めたことがある。

梨花：友悟の高校時代の友人。保育士をする傍ら、趣味で絵本を書いている。人の心情を見抜くのが上手い。

秋元：結良が最近身を寄せている男性。何人もの女性と肉体関係を持っており、結良はそのうちのひとりに過ぎない。

【これまでのあらすじ】

静岡県沼津市に住む会社員の友悟は、学生時代に知り合った同い年の結良と半同棲の生活を送っている。結良は孤独を感じたり自己肯定感が下がったりすると明け方に魚に変身する体質で、頻繁に魚にならないようにＳＮＳで知り合った男性と肉体関係を持つことで精神状態を保っていた。わけあって友悟は自分の家を結良に開放し、平日は知らない男のもとで過ごす結良が、せめて土日はゆっくりできるような居場所を用意していた。

友悟は冬頃から結良が魚になる頻度が増えていることに気付いた。結良に何かあったのか尋ねてみると、結良がこの頃よく過ごしている「秋元」という男に見捨てられたのだという。友悟はそれを聞き、結良に男と寝る習慣をやめさせるべきか迷うが、結良の精神に根本的な理由があるのではないかと考え、結良を精神科に連れて行こうとする。しかし結良は病院に行くことに強い拒否反応を示し、翌朝、友悟には何も告げぬまま家を飛び出すのだった。

結良が友悟の家を飛び出して一か月が経った。結良はあれから一度も帰って来ていない。
沼津に雪が降ったのは結局結良が出ていった翌朝のみで、三月の気温は春の気配を漂わせ始めている。土曜日のカーテンを開けるとやわらかな日差しが射し込んだ。友悟は結良のラインに、毎週のように「大丈夫？」とメッセージを送った。
先週、先々週に送った同じ文言の下には、小さいグッドマークが付いている。結良が送ったものだ。結良の返信は、すべてこのマークに込められていた。それ以上の言葉は結良から送られてこない。
トーストとコーヒーの簡単な朝食をとり、テレビを少し眺めてから風呂場に向かった。音楽アプリを開いて音楽を流しながら、スポンジで浴槽をこする。昨晩浸かった汚れが浴槽の手すりに溜まっていた。
土曜日に結良がいた頃は、早朝に結良が魚になるのに備えて冷水を張っていたものだったが、今はその必要もない。雪が降った日の翌週に、友悟は風呂掃除をしようと右足を浴槽に入れて、そこに溜まっていた水がなまぬるいのに驚いた。普段だったら冷たい水が浴槽で揺れているはずだったが、結良がいないので昨晩の湯がそのまま残されていたのだった。
あれから何週も経って、さすがに友悟も驚かなくなった。
音楽アプリの曲が切り替わる。プレイリストは友悟の好きな一昔前の邦楽で構成されていた。すこし沈黙をおいて「傘がない」が流れ始めた。友悟は浴槽に付着した洗剤の泡をシャワーで流しながら、今朝のニュースに自殺者数の推移を表した棒グラフが出ていたのをおぼろげに思い出して、不思議な偶然を感じた。それから一瞬結良のことを考えた。
風呂掃除を終えた手を拭いて、スマートフォンを手に取った。友悟は通知欄に井上からのメッセージが届いているのに気が付いた。
「今日時間あるか？」「お前んちに遊びに行ってもいい？」
友悟の返信。
「何にもないけどそれでもいいならいいけど」
井上はちょうど昼時にやってきた。
友悟はあえて昼食をとらないで井上を待っていた。友悟の予想通り、井上も昼食をとらずに来た。簡単にチャーハンを調理して二人で食べた。
「どうして急に遊びに来たんだ？」
「どうしてって、特に理由はないけどさ。今日は特に用事もなくて退屈してたんだけどさ、ふいにお前の家行ったことないなあって思ってさ、それでラインしたわけだよ。なんだかさ、お前らしい家だよな。無駄なものが無くて、モデルルームみたいな清潔感があるっていうかさ。わかる？　この感じ」
「わかるかって言われても、俺の家だからなあ」
井上はポケットからマルボロの箱を取り出すと、断りもせずに火を点けた。煙を吐いてから、ようやく慌てて近くの窓を開けて、外に向かって煙の白い余韻をあおいだ。井上がいたずらっぽい表情で笑うと、白い歯がのぞいた。
「そうだそうだ。この写真見てくれよ」
井上はスマートフォンを取り出すと、一枚の写真を見せてきた。女性の写真で、髪が長く、薄めの化粧だったが美しい顔立ちだった。どこか欧米の女性を思わせる顔である。
「俺の彼女」
「彼女？　お前、この前もそんなこと言ってなかったか。ほら、ショートカットで眼鏡の子の写真だよ」
「ああ？　ああ、あの写真？　あれは彼女じゃねえよ。あれは女優の、何だっけな、名前忘れちまったけどさ、朝ドラにも出てる人だよ。彼女なわけないじゃんか。もしかして本当に信じてたのか？　俺はほんのジョークのつもりで言ったのに」
「朝ドラ見ないからわからないよ」
「そうだな。おまえみたいなやつが最近のドラマなんか見るわけないか。そりゃわかんないはずだ。でもこの写真の子は本当だよ。本当の本当。疑うなら、ほら、この写真見てみ」
井上とその女性が、観覧車の頂上で頬を寄せている写真だった。
「本当に付き合ってるんだよ。綺麗だろ、彼女」
「ああ、綺麗だと思うよ。外国の人みたいだ」
「俺も最初会ったときはそう思ったけど、両親とも日本人だってさ」
「それにしても、どこでそんな人と出会ったんだよ。会社にそんな子いないだろ？」
「若年寄にはわからないかもしれないけどさ、最近はマッチングアプリで出会うんだよ。出会い系ってやつだな。アプリで登録してさ、気になる人と連絡とって会えるわけだよ。これで知り合ったのさ」
「マッチングアプリね、聞いたことはあるけど。そういうのって怖くないの。詐欺とか、怪しいやつとかさ」
「ほとんどないよ。これ使ってる友達多いけど、詐欺られたやつってのは聞いたことないな。おまえも良かったら使ってみなよ。まあ、そう言ってもおまえはどうせ使いやしないんだろうけどさ」

「どうかな。使うときがくるかもしれないよ」
しばらくして井上は、友悟の部屋に入りたいと言った。特にやましい物があるわけでもないので、友悟は井上を部屋に通した。
友悟の部屋は二階の一室にある。部屋には仕事をしたり書き物をしたりする机と、木製のベッド、それから本やCDが並べられた棚と箪笥が置かれている。
井上は「結構狭い部屋なんだな」と、友悟の部屋を見て回った。棚に入っているCDの中から何枚か手に取ってみたり、すっかり表紙がくたびれた本のページ数を見たりした。
「俺がイメージした通りの部屋があるって感じだわ」
友悟は「それはよかったよ」と返した。
「この家っておまえの金で買ったもんじゃないだろ？」
「ああ。子どもの頃からずっとここで暮らしてる」
「おふくろさんが亡くなったのは二年前だったな」
「よく覚えてるな」
「俺はまだどっちの親も生きてるからわかんないけどよ、女手ひとつで子どもを育てるってのは大変なことだよな。一回しか会ったことないけどさ、おまえのおふくろさん、ずいぶんしっかりした人なんだなってのは一目見てわかったよ」
井上は友悟の部屋を一通り観察し終わると、部屋を出た。
「それにしても、おまえ一人で住むにしては立派すぎる家だな。早く彼女でも作って一緒に住んじゃえばいいのに。二階にもっと部屋は余ってんだろ？」
井上は廊下の先にある部屋を見た。結良が使っていた寝室だった。
「てかおまえ、あの部屋にもベッド置いてるのか」
井上が寝室に行こうとするのを、友悟は思わず手を掴んで止めた。井上は驚いた後、何かを察したかのように薄い笑みをこぼした。
井上は友悟の手を振りほどくと、寝室に入っていった。友悟も追った。寝室には結良がいなくなった日の寝具がそのまま残されていた。掛け布団の上には、結良の青いパジャマが畳んで置かれている。
「これ、女物のパジャマだろ？　しかもこんな爽やかな色だ。兄弟姉妹のいないお前が着るもんじゃないな。なんだよ友悟、彼女がいるんだったら早く教えてくれよ。それともあれか、俺に知られたらちゃかされるとでも思ったのか？　まったく悲しいね。俺はそんな意地悪なやつじゃないよ」
「いや、それは」
友悟は結良が正確には彼女ではない、ということを言おうとしたが、やめた。余計な疑いを生んでしまうような気がした。「あまり他の人には知られたくなかったんだ」、それから「悪く思わないでほしい」と井上に言った。
「べつに何とも思ってないよ。人間には内緒にしておきたいことのひとつやふたつはあるって言うだろ？　でも驚いたぜ。もし何か相談したいことがあったら気兼ねなく言えよ。俺はそれなりに恋愛経験あるからね。でもあれか、実は隠していただけでおまえも相当な遊び人だったりするのか？」
「さすがにそれはないよ」
井上は笑いながら寝室を出ていった。いつも通りのいたずらっぽい笑い声で、友悟は井上が気を悪くしてはいないことがわかってほっと胸を撫でおろした。
井上は間もなく帰って行った。誰もいなくなった家の中で、友悟はもう一度結良の寝室に戻った。寝室の様子は先ほどと一切変わっていない。青いパジャマがきれいに整えられて置かれている。
ベッドの上に腰を下ろすと布団の中の羽毛がふわりと舞い上がった。友悟はそれをつまむと、しばらく見つめていた。ガラス窓の向こうの空に雲は少なく、水色のヘリコプターがよろよろと港のほうへと飛んでいる。窓を開けて、つまんだ羽毛を風に流した。ヘリコプターのほうへ向かって羽毛は浮かんで行った。
暖かな風が寝室に流れ込む。結良はいつ帰ってくるのだろう。きっと他の男のもとで暮らしているのだろうけど、魚になっていないだろうか。魚にはなっていなくても、さみしさを心に溜めていないだろうか。友悟はそんなことを考えてみる。友悟の鼻に甘い空気が流れ込んだ。
しかし窓を閉じると、風の流れのなくなった部屋の中で、再び友悟の心に暗いものが降りてきた。気体のように肺に満ちたさみしさを誤魔化すように、友悟は自室に戻り、机の上の琥珀色のポッピンを吹いてみる。

井上は度々、彼女との関係について友悟に尋ねた。
「名前はなんていうの、おまえの彼女さん」「最近の関係はどうだ？　うまくやってるか？」
友悟に彼女がいるということは井上以外の誰も知らないようで、そのあたり、井上はしっかりと口を封じているのだった。友悟は井上が単純な好奇心から訊いていることを知っていた。ここで変に隠そうとすると、却って井上に怪しまれる可能性もあった。友悟は至って平然と、
「そんな数日で関係は変わらないよ」
と笑ってみせたり、
「昨日は一緒にホワイトシチューを作ってみたんだ」
と言って写真を見せたりした。その写真はたしかに昨日

友悟が撮ったものだったが、行方知れずの結良が友悟とキッチンに立っているわけがなかった。鍋の中で煮えているシチューは、間違いなく友悟がひとりで作ったものだった。

井上が友悟に尋ねてくるので、友悟も井上に彼女との関係を尋ねた。井上はスマホの写真を見せた。桃の花の咲く下でピースサインをする井上と、彼の右腕を掴む若い女性の姿が確かに一枚の写真の中にいる。ふたりの間に、隠された何か暗い影のようなものは何も見つからなかった。背景の桃の花と遜色ない男女の写真だった。友悟は思わず写真から目を背けたくなった。

友悟の持つ写真のどこにも結良はいない。結良とのラインも、このところは既読もつかなくなった。

三月も終わりに差し掛かった土曜日、友悟はかつて母親が使っていた部屋を掃除した。母親が癌で死んでからもうずいぶん経ち、部屋の中にあった古い家具や使い道のない道具、すっかり壊れかけの飾り物の類は、友悟がこつこつと処分して、がらんとした部屋には木製の土台だけとなったベッドが置かれていた。

友悟は工具で以てベッドを解体すると、縄で縛って玄関の外に置いた。さっぱりとした部屋で白いカーテンが靡いている。友悟は巻き尺で部屋の大きさを測った。

焼却場は香貫山(かぬきやま)の麓にあった。友悟は解体され薪のようになったベッドを抱えて焼却場の職員に手渡した。ちょうど職員は籠付き四輪車の中に入れられたごみを運び出すところだった。友悟が四輪車の中に木材を入れようと籠の中を見ると、熊のぬいぐるみがぎっしりと敷き詰められていた。

「ぬいぐるみコレクターの父親の遺品だそうだよ。奥さんが亡くなってからぬいぐるみばっかり集めるようになっただって。せっかくお父さんが集めたものなんだから、手元に保管はできなくても、ほらねえ、売るとかさ、親戚に渡すとかさ、いろいろあるじゃんねえ。どれも綺麗なぬいぐるみだしさ。燃やすのは気の毒っていうかさ」

中年の職員は苦笑いしながら木材を受け取った。焼却施設へ四輪車を押していく彼を見送ると、友悟の中にも母親の遺品を分解したことへの後悔が生まれかけたが、すぐに気を直した。友悟には買いたいものがあったのだ。

焼却場を出たあたりで雨が降り始めた。

カー・オーディオのボタンを押して、車内に「氷の世界」が流れ始めた。

誰か指切りしようよ　僕と指切りしようよ
軽い嘘でもいいから
今日は一日はりつめた気持でいたい

〈井上陽水「氷の世界」〉

ガラス窓に細く長い雨がぴしぴしと刺さってくる。友悟の車は県道三八〇線から一四五線に入り、三島へと向かう。雨脚も伴って強くなって行く。窓を開けると、春とは思えない冷気がすべり込んできた。

冬に井上と行った熱帯魚ショップに入り、友悟は真っ先にとある水槽の前に向かった。黄色い体のその魚は、水槽の中でゆっくりと、そして微かに尾鰭を動かしながら、視線は水槽を見つめる友悟の顔をじっと見つめて逸らさない。まるで両者の目が一本の線で結ばれているようだった。

店の奥で店主が釣りの雑誌を読んでいる。女性の店主で、飴玉でも舐めているのか、口の中がもごもごと動いていた。友悟は店主の前に立った。

「どうかいたしましたか」

「あの魚が欲しいのですが」

「どの魚でございましょう」

店主は椅子から立ち、友悟に導かれてその魚の水槽に向かった。

「この魚をください」

空っぽの母親の部屋に巨大な水槽が運び込まれる。業者が二人係でやっと持ち上げられるサイズで、部屋の大きな台の上に水槽を持ち上げるとき、業者の太い腕に力が集中し「ボコッ」と音さえ聞こえそうな膨らみ方をした。

あらかじめ買っておいたフィルターや照明や水槽用ヒーターを水槽に取り付けた。もともと母親の部屋にあった白いカーテンは取り外され、代わりに新しい遮光性の黒いカーテンが付いている。業者は手慣れた動きで水槽や器具の設置を終わらせると、

「それでは設置のほうは完了しましたので、私どもはこの辺で失礼いたします」

と家を後にした。

「どうもありがとうございました」

友悟は業者のトラックを見送って、改めて母親の部屋に入った。

水槽に差すライトが部屋の唯一の光源となっている。そのライトの光を、アロワナの黄色い鱗が反射して、ガラスの水槽にぶつかる。光が四方に飛び散って糸くずのように見える。エアレーションから細かな気泡が生まれる音と、水槽用ヒーターの振動音が鼓膜に肌理の細かい振動を生んだ。

友悟は膝に手をついてアロワナと目線を合わせる。井

上と初めて熱帯魚ショップにやってきたとき、二度目に店に入ったとき、そのときとまったく変わらない黒く集中した目玉で友悟を捉えている。きっとこれから毎日水槽の中を覗いてみても、この目玉の様子は変わらないだろうと友悟は思った。

アロワナは結良とは違う。魚と人間の間を行ったり来たりすることはない。アロワナはいつでも水の中で魚の形をして存在している。笑ったり泣いたりすることも、自分に向けられた他者の視線に悩むこともない。アロワナが見ているのは、自分の目の範囲内にある物だけ。ただ目に映ったものを見ているだけだ。

友悟が立ち上がると水槽の上からアロワナの姿が見える。エアレーションの気泡で少し歪んではいるが、体がほんの少し揺れているのが見てわかる。その様子は、結良が浴槽の中で魚の動きをしているときとほとんど変わらない。友悟は何度も、こういうふうに結良が水の中にいるのを見てきた。見慣れている姿だった。しかし普段さざ波のように寄せて来る結良のいないさみしさは、このときはやってこなかった。浴槽の結良の代わりに、水槽の中にはアロワナがいた。黄色い花のような魚が、水槽の中で揺蕩う。

ある日、いつものように会社で井上が絡んできた。

「友悟、おまえっていつも彼女と出かけるときどこに行くのよ。もう四月になるしさ、そろそろ彼女とどこかに行こうかなって思うんだけどさ、なんか良いところ知らないか？　あ、花見は今度行くから、それ以外で頼むよ」

「井上、お願いなんだけど、これから会社では彼女の話をするのをやめてほしいんだ」

「なんで。なんか悪いことでも言ったか？」

「いや、おまえは何も悪くないんだけれど、仕事のときは仕事に集中したいんだ。もちろん彼女のことは愛しているんだけれど、それをあまりデスクにまで持ち込みたくないんだ。この気持ち、わかってくれるかな。おまえは器用だから、恋愛しながら仕事をすることだって容易いだろうけど、おれは不器用だから、どうしても地に足が付かなくなっちゃうような気がする。それに、同期のおまえとは社内の立場も結構差がついてる。今度から静岡市の本社のほうに行くんだろ？」

「うん」

「そろそろおれも、将来に向けてしっかり仕事で成果を出さなきゃいけないと思うんだ。だから社内では仕事に集中させてほしい。井上が何かをしたとか、決してそういうんじゃないんだけれどね」

「……わかったよ。まったくおまえは真面目というかなんというか、俺が放って置いたらそのうち『悟りを開きたいから』とか言って山に籠り始めそうだな。俺が思う感じ、おまえはそんなに禁欲的にならなくたってやってけると思うけどなあ。まあ、おまえがそう決めたってんなら、俺は邪魔をしないよ。人が嫌がってることをやるような人間じゃないんでな」

「嫌がってるわけじゃ――」

友悟が慌てると、井上は高笑いをした。昼休みの車内に井上の笑い声が響き、近くの同僚たちが一斉に井上のほうを見た。井上は口に手を当てて恥ずかしそうに軽く頭を下げた。

友悟が井上にこんなことを言ったのは仕事に集中するためではなかった。あれは、井上を自然に納得させるための嘘に過ぎなかった。本当は、いなくなった結良のことを考えないようにしたかっただけなのだ。

結良がこのままずっと帰ってこないのではないかということは、友悟の中でも薄々思い始めてきたことだった。もしかしたら彼女は新しいパートナーを見つけて、彼のもとで暮らすことに決めたのかもしれない。自分よりも素晴らしい相手と巡り合ったのかもしれない。そんなことを考え始めると、過去に自分が結良にしてきた数々のことが思い出されて、怒りや悲しみや孤独が混ざり合った黒っぽい感情があぶくを立てて上がってくるように感じる。

友悟がまだ大学生だった頃、深夜の千本浜をふらふらと彷徨う危なげな旧友 結良の姿を発見して自分の家で世話をするようになったことを思い出す。後で訊いてみると、結良は高校時代に親の離婚がきっかけで初めて魚になり、ヒステリックな父親のもと、数日おきに魚になるようになったそうだった。水泳の授業で自分の指が魚のヒレに変わってから学校にも行かなくなり、中退。父親の怒声と、人との付き合いがなくなった孤独と、社会的な劣等感とで、いっそ海に飛び込んで魚になってしまいたいと海岸をふらつくことが増えたみたいだった。

それから友悟は自分の生活の中に結良を組み込んで、人間としての結良の世話や、魚の結良の世話、そしてふたつの間で悩む結良の心の世話をしてきた。それは決して容易いことではなかった。しかし友悟は何年間もそれを続けてきた。そして結良は、先日突然友悟のもとを去ったのだ。

友悟はしばらく結良のことを考えたくなかった。考え始めると切りがない。何日、何十日、何か月かかるかわからないが、何とかして結良のことを忘れよう。貯金を崩して買ったアロワナも、井上への頼みも、すべてはこのためだった。

友悟は会社から帰ると、真っ先にアロワナの部屋に向

かった。部屋の入れ物から人工飼料とデュビア(注：魚の飼料として用いられる虫の一種)のパックを取り出して、水槽の上から振りかける。上から降りてきた餌を見ると、アロワナはゆっくりと体を動かしてそれを食べる。その間もアロワナは一切表情を変えない。暴れもしない。至って静かに、まるで儀式のような食事風景だった。

友悟は水槽の前の椅子に腰を下ろして、アロワナが餌を食べ終わるまでゆっくりと眺めていた。なぜかはわからないが、こうしていると心が落ち着く。飼育器具の小さな音すら心地いい。このままぶたを閉じれば、一時間くらいは眠ることもできそうな気がする。黄色い鱗がアロワナの動きとともに光を散らして美しく輝く。もし宝石が生きていたらこんな感じだろうか。

アロワナが食事を終えると、友悟は椅子から立ち上がった。風呂を沸かして、それから夕食の支度をしなければならない。

階段を降りようとして、ふと向こうを見ると結良の部屋が目に入った。ドアが開け放しになって、中の様子が廊下から丸見えになっている。友悟は毎朝、結良の部屋を含むすべての窓を開けて換気をするのだが、そのときに開けたドアがそのままになっていたのだ。

友悟はドアを閉めようと部屋に向かった。開け放しだと、二階に来るたびに結良のことを思い出してしまう。

結良が帰ってこないのだと頭では思っていても、死んだ母親の部屋のように中の物を処分する気にはなれなかった。ベッドも、布団も、パジャマも、棚も、服も、机の上の小物も、もう必要のない物のはずだった。売ってしまえば十分な金が入って、アロワナの餌を買うのに使うことができる。しかし、友悟はそれができなかった。

広小路駅から大社に向かって伸びる通りは花見の客で混み合い、すれ違う人と危うく肩が当たりそうになる。源兵衛川沿いの小道にも人がいて、あれは鰻屋の順番を待つ客か、清流に戯れる子どもを見守る親だろうと友悟は歩きながら思った。源兵衛川は水遊びができるように浅めに整備されていて、靴を脱いで裸足になれば指の隙間から抜ける富士山からの湧水が心地いい。

井上の言葉がなければ、花見を忘れていたに違いない。去年は嵐で花が早く飛ばされてしまって、辛うじて山王神社の桜の、わずかに残っているのを結良と見に行ったきりだった。沼津の人間の友悟は、例年ならば山王神社や香貫山へ花見に行くが、今年は三嶋大社の桜を見に行こうと決めた。

大社の鳥居をくぐると、花見の客を寄せる屋台がずらっと並んでいた。池の向こうに枝垂桜(しだれざくら)が花を咲かせてこうべを垂れている。そして本殿へ歩いていくと染井吉野が満開である。

人ごみの中で参道を進み、本殿で賽銭を投げてから、祝捷碑(注：日清戦争の勝利を祝す巨大な石碑)の前で腰を下ろした。春の日差しが桜の枝の隙間からこぼれて、心地いい暖かさがした。友悟は屋台で食べ物を買ったり、桜の花を指さす人々をぼうっと眺めていたりした。手を繋ぐ男女も友悟の前を通ったが、桜の花があまりに美しいせいでただの風景のように見えた。

十一時半を過ぎて、小腹が空いてきた。友悟は何か買って食べようと、立ち上がって屋台のほうへ歩き出した。池を挟んで向こうに、先ほど友悟が通ってきた参道が見える。

ふと、参道を歩く小さな人影に見覚えがあった。友悟は目を細めた。白いワンピースを着て、背の高い男性と並んで鳥居のほうへ歩いている。

「結良、」と友悟の口からこぼれた。その姿はまさに結良そのものだった。あの白いワンピースを着た結良を、友悟はこれまでに何度か見たことがあった。結良のお気に入りの服装だった。

遠い女性は隣の男性と話しながら歩いて行った。距離はあったが、友悟は彼女の表情がにこやかなことを見逃さなかった。友悟に見せるときと変わらない、穏やかでやわらかい表情だった。

「あの男は誰だろう」

そのとき、友悟は結良の言葉を思い出した。家を出ていく前の夜、結良が言った言葉だ。

『もう秋元さんのところに行かなければいいだけだと思うし』

結良が身を寄せていた男の名前である。友悟はその「秋元さん」という男を見たことがなかったし、結良と歩いているのが「秋元さん」だという確証はなかったが、なんとなく直感的にあの男が「秋元さん」ではないかと思った。人ごみのせいで、男の顔は見えなかった。

友悟は結良を追いかけようと、鳥居のほうへ歩き出した。屋台の隙間から辛うじて二人の様子を見ることができる。きっと花見を終えて帰ろうとしているのだろう。歩調を早める。

声をかけたい。結良と話したい。話せはできなくとも、さりげなく近づいて、あの女性が結良であることは確かめたい。風が吹いて、桜の粒が友悟の髪に降る。

そのとき、友悟の腕を誰かが掴んだ。友悟は振り返った。

「友悟？」

女性が友悟の腕を掴んでいた。突然のことで、友悟は

その女性が誰なのかを理解できなかった。
「友悟だよね？　やっぱり。なんか見覚えがあるなあって思ったんだよ。人違いじゃなくてよかった。どうしたの？　私が誰かわかる？」
「梨花」
「よかったよ、忘れられちゃったのかと思った。私も花見に来たんだ。大社の桜は綺麗って前から聞いていたから、一回見に行きたいと思ってて」
「僕もだ」
友悟は後ろを振り返った。結良らしき人の姿はもう群衆の中に消えてしまっていた。
「何かあった？」
「いや、とくに、何も」
「そう。ね、ちょっとお茶しない？　せっかく会ったんだし、お話ししようよ」

友悟は梨花に連れられて、大社の近くの喫茶店に入った。広小路駅のすぐ近くのこじんまりとした喫茶店だった。喫茶店に来るまでの道中、友悟はしきりにきょろきょろと辺りを見回したが、徒労に終わった。
梨花はコーヒーとサンドイッチを頼み、友悟はコーヒーとナポリタンを注文した。
「まさかこんなところで友悟に会えるなんて思わなかった」
「僕だって梨花に会えるなんて思わなかったよ。会うのは秋以来だね。元気にしてた？」
「一応元気。普通ってとこね。普通に仕事をやって、普通に疲れて、普通に休んでるって感じ」
「そっか。前に言っていたあれはどんな感じなの。ほら、絵本を出版するって言ってたじゃない」
「ああ、絵本ね。本当ならば結構段取りが進んでるはずなんだけど、聞いた感じだと色々遅れてるみたい。まあ、私の経験不足が原因のところもあるんだけど。でも今年の秋には出版できそうよ。もし出版出来たら、あなたにもあげる。あなたは、私の少ない友達だから」
ありがとう、と友悟は言ってナポリタンの最後の一本をフォークに絡ませた。梨花はその様子を黙って眺めていた。
ねえ。梨花が言う。
「彼女さんはどうしたの？」
友悟はそれを聞くと、梨花から目を逸らして窓のほうを見た。梨花と目を合わせると自分の心をすべて見透かされるのではないかと思ったからだった。窓の外では何台もの車がひっきりなしに往来している。友悟は梨花が黙って自分のほうを見つめているのに気づいた。
「友悟、高校のときから思っていたことなんだけどね、あなた、何か隠していることがあると窓のほうを見るの。目を背けるみたいにね」
梨花はゆっくりと、まるでブラックコーヒーにミルクを混ぜるように言った。友悟はたまらなくなって梨花のほうを向き、苦笑して
「やっぱり梨花は人の心を読むのが上手いね」
と言った。
「私の両親はよく喧嘩をするの。そのせいかわからないけど、昔から人が何を考えているのかとか、何を言われるとどう反応するのかを観察してしまう。きっとあなたにはわからないでしょうけど、人の気持ちが読めるのは、必ずしもいいことばかりじゃないのよ」
「それ、僕にも何となくわかるような気がする」
「いや、わからない。だってあなたと私とはまったく別の人物だもの。ねえ、友悟。彼女さんと何かあったの？　もし悩みがあるなら、聞くよ」
友悟は黙った。結良とのことを話すか否か。本心では隠したいことだったが、隠したところで、きっと梨花にはすべて暴かれてしまうだろうと思った。あの鋭い視線。人の心を見抜く視線を向けられれば、あの夜のことだって、詳細まではいかなくても大体のことは知られてしまう。
「一か月以上彼女に会えていないんだ。結良、これは僕の彼女の名前だけれど――」
友悟はそこで一度唾を呑み込んだ。一瞬ためらって、それからすべてを明かすことを決心した。
「結良はさみしさが溜まると魚になる。たとえば、誰かに冷たくされたり、ひどい言葉を言われたりすると、魚になるんだ」
それから友悟は、あの夜のことについて梨花に話した。結良が魚になることは隠したままで、心の病を抱えているのだと説明し、あとはそのまま結良を病院に連れて行こうとしたことやそれを結良が拒絶し家を出ていったこと、そして連絡もつかなくなったことを話した。
梨花はコーヒーカップをかき混ぜながら、友悟の話をうなずいて聞いた。そして友悟が話終わると一気にカップを傾けて中身を飲み干してしまった。
「つまり、友悟は結良さんの心の状態を考えて病院に連れて行ったほうがいいと思ったけれど、結良さんはそれを嫌がって出て行ってしまった、ということね？」
「そう」
「友悟の行動はたしかに正しい。正直、今の話を聞いてる限りだと結良さんの病気は結良さんがひとりでどうにかできるものではなさそうだね。病院とかカウンセラー

に行って、一回診てもらったほうがいいかもしれない。でも、これは私みたいな赤の他人の意見であって、これが結良さんにとって本当に最善の選択なのかはまた別だと思う。少なくとも、あの短い時間で病院に行くか否かを決めるのは、難しいことだと思う」

「どうして?」

「たぶんね、結良さんが病院に行くのを拒んだのは、病院で何かをされるのがこわいんじゃなくて、自分が精神的に他の人とは違う人間だってことを知るのがこわいんだと思う。病院に行って、診察を受けて、『あなたは○○の病気を持っています』って言われて、それから薬局で何かしらの薬を貰う。これって当人からしたら間違いなく異常者の烙印なのよ。私、さっき『人の心を読めるのはいいことばかりじゃない』って言ったでしょう? 私は人の心を読め過ぎて、そして人の視線が気になり過ぎて、パニックになったことがあって、それで親に無理やり病院に連れていかれたことがある。すごい前のことだけれど、今でもあのときのことは覚えてる。お医者さんに私の名前と病名が一緒に呼ばれたことのショック、今でも覚えてる。私って普通の人じゃないんだなって実感した。今思えばあのとき病院に行ったことは間違いなくプラスだったはずなんだけど、でも、こわかった。だから、もし結良さんを病院に連れて行かなければならないなら、友悟、しっかりと結良さんに寄り添ってあげて。時間をかけて話し合ってあげて」

友悟は黙ってうなずいた。

「それから」

友悟は自分のコーヒーを飲もうとカップに口を近づけて、そのまま飲まずにテーブルに置く。

「あなたって案外さっぱりしているのね」

「さっぱりってどういうこと?」

「彼女が家を出ていったのに、あまり表情に出ていないっていうか、落ち込みすぎていないっていうか、思ったよりも普段の友悟と変わらないなって」

「そうかな。結構焦っているけれど、結良がいなくなってからはね」

「なら、いいけれど。私の中ではもっとわかりやすく落ち込んでいると思ってた。高校の頃からずっと、あなたって気持ちがまっすぐ表情に出る人だなって感じてたんだけど、やっぱり何年も経つと人間って変わるのかな。それとも私が最初から勘違いしてただけだったりして」

梨花の言葉が、友悟の胸に梵鐘の鳴るように重く響いた。友悟は自分の目が大きくなるのを感じたが、梨花は自分のバッグのほうに視線をやって、友悟のほうを見なかった。助かった、と思った。弾丸が目の前をかすめたような冷たさが首筋に走った。

やっぱり梨花は人の気持ちを読むのが上手いのかもしれない。

友悟は梨花と別れてから、車の中で何度も梨花の言葉を反芻していた。彼女の言う「さっぱり」という単語が妙に引っかかっていた。友悟はハンドルを回しながら、すぐにこの違和感の元に気付いたが、呑み込もうとした。それは早急に解決しなくてもいいことだったし、そのうちにわかるだろうことだったからである。しかし何度交叉点を越えても、痰のように喉に絡んでくるのだった。

自分は結良の何なのだろう。

男女の関係ではないはずだった。友悟と結良は互いにその約束を交わしていないからである。だから友悟と結良は性的関係を持ったことはないし、贈り物の類もしてこなかった。井上や梨花には、結良を彼女だと言っていたが、あれは話をややこしくしないための言葉に過ぎない。

友悟は自分を結良の保護者だと思っていた。精神が不安定な結良の居場所を作り、魚になれば世話をし、悩みがあれば相談に乗る。自分はあくまで結良を待っている人間なのだと、友悟は何度も自分に言い聞かせてきたが、それが最近どうもわからなくなってきた。

結良の保護者ならば、どうして結良がいなくなったことにさみしさを感じるのだろう。さみしさ、いや、このところは危機感のようなものも感じるようになってきた。自分が世話をしてきた結良が、肉体関係だけの男のもとへ行く。嫉妬なのだろうか。いや、自分は結良の恋人ではないはずだ。恋人でもないのに、どうしていなくなった結良のことにずっと悩まなければならないのだろう。

考えてみれば、結良が家を出ていったのは彼女なりの自立なのかもしれない。自分で自分の身を守ろうと決心したということかもしれない。あの秋元という男とは(神社で見た男が本当に秋元だとしたら)、恋愛関係に発展したのかもしれない。だったらどうして自分がそれを邪魔できようか。そっとしておくべきだ。結良が決めたことなのだから。

家に到着し、友悟はいつものようにアロワナに餌をやった。餌を水槽に落とすと、美しい黄色の熱帯魚はそれを捕らえて咀嚼した。

でも——。友悟は餌のパックを持ったまま思う。結良の保護者がどうして慰みにアロワナを飼うんだ? 結良がいなくなったさみしさをどうして熱帯魚で埋めようとするのか? 自分は結良のことを好きなのかもしれない。ずっと奥に隠していただけで、保護者を演じていただけで、本当は結良のことを愛していたのかもしれない。そ

う考えると、一切がぐらついてくる。床の木目がわからなくなってくる。

疲れているのかもしれない、と友悟は思い、シャワーを浴びてからすぐに布団に入った。イヤホンをつけて、普段は聴かないようなピアノのメドレーを流しながら眠りについた。おでこの辺りが汗ばむような感じがしたが、イヤホンをつけているせいで心臓が早くなったのは聞こえなかった。

いつもより早い時間に布団に入っただけあって、すぐには眠れなかった。しかし目はずっとつむったままだった。一度目を開けてしまえば、また無数の疑問が自分の頭に降り注ぐような気がして、友悟は顔を天井に向けたまま、ひたすら流れてくるピアノの音に集中した。そんな時間が長く続いた。もう、今が何時なのかもはっきりしない。

突然、友悟の布団が重くなった。上から重しを載せられたようだった。友悟の腹部が圧迫される。だがそれは、決して鉄の重しのそれではなかった。まるで圧縮した綿の塊を載せられたような、仄かな優しさがあった。

友悟は金縛りだと思った。金縛りを体験するのは初めてのことだった。オカルト雑誌などで金縛りの体験談は何度か読んだが、こんな感じなのだろうか。友悟は試しに腕に力を入れた。すると腕は簡単に持ち上がった。あれっと面食らった。

持ち上がった友悟の腕を、イソギンチャクのような細いものが包んだ。友悟は気味が悪くなった。目を開けると、そこには結良がいた。結良が自分の上に乗って、両手で友悟の右手を掴んでいる。

「ただいま」

暗闇の中で結良は優しい微笑みを浮かべる。右手を離して、友悟の唇にキスをした。舌が友悟の歯の隙間をこじ開けてくる。成すすべもなく友悟は結良の舌を迎えた。甘い香りがした。これまで嗅いだことのない結良の香り。ベリーのような甘い香り。

結良はそのまま友悟の服を脱がせた。友悟は結良の為すがままになった。部屋の中に幾度も波が押し寄せ、引いていった。その中で友悟の体は揉まれ、甘い香りの中で、海岸はゆっくりと湾曲していく。

「友悟、突然いなくなってごめんなさい。私やっぱり、友悟のそばにいたい。友悟と一緒にいるときがいちばん落ち着くし、人間のままでいられるような気がする。だからこれからは私、友悟のそばにいる。だから友悟も、ずっとそばにいて」

もう一度深いキスをして、結良は友悟と指を絡ませて手を繋いだ。友悟は起きた出来事を理解しきれていなかった。ようやくやってきた眠気と、それからあまりに甘い香水の匂いで、すっかり友悟の感覚は混乱していた。こっそりと自分の頬をつねって、これが夢でないことを理解したが、現実にしては非現実的だった。

隣を見ると、やはり裸の結良が眠っている。真っ白の肩が見える。

「これね、友悟から貰って、ずっと持っていたの。ポケットに入れて、ずっと持ってた」

結良は一個のビー玉を取り出した。いつか家の前のビー玉売りから買った、あの海色のビー玉だった。結良は細い指でそれをつまんで、友悟の顔の前に持って行った。ビー玉に友悟の顔が反射した。その顔は歪んで、ほとんど友悟の顔だと判別することはできなかった。それでもビー玉は海を閉じ込めたような美しい色で、今にも海水がこぼれてきそうだった。

参考：「氷の世界」（作詞・作曲 井上陽水 一九七三年）

続